京都大学言語学研究 (*Kyoto University Linguistic Research*) **33** (2014), 133–165

ラテン語における印欧語の接辞 *-*ti*-
— 語根構造と母音階梯との関係から—*

大西　貞剛

1　はじめに

接辞 *-*ti*- はインド・ヨーロッパ祖語 (以下印欧祖語) に再建される接辞の 1 つで、動詞語根に付加されて名詞を形成する。この接辞は語根のゼロ階梯に付加され「抽象名詞」を派生すると長い間想定されてきた。しかし、実際に在証されている語形やその意味を観察すると、抽象名詞とは考えにくい意味を持つ形式や、語根のゼロ階梯に遡るとは思えない形式が印欧語の各語派に残されていることも事実である。本論文では、接辞 *-*ti*- を持つ形式としてラテン語に残されている形式を収集及び分類し、語根構造と母音階梯との関係について考察を行う。その結論として、全ての語形が一律に語根のゼロ階梯から派生しているのではなく標準階梯に遡る語根を持つ形式が見つかること、そしてそれらは CeT(T)- および CeH- という語根構造を持っていること、更に、それらの構造を持たないにも関わらず、標準階梯 (しかも *o* 階梯) に遡る形式が見られることを主張する。

本論文の構成は以下のようになっている。第二章では印欧祖語における語根の構造及び母音の階梯について確認した後に、印欧語の各語派 (とりわけギリシア語とサンスクリット) における接辞 *-*ti*- の現れから印欧祖語に再建される接辞 *-*ti*- の振る舞いについて確認する。その後イタリック語派における接辞 *-*ti*- の振る舞いについて確認する。第三章では語形を母音構造に従って分類した先行研究を確認し、第四章では接辞 *-*ti*- を持つラテン語の語形を語根の構造に従って分類する。第五章でそれらに考察を加える。第六章はまとめである。

* 本論文は平成 22 年度提出の修士論文「印欧語の接辞 *-*ti*- のラテン語における発展」の一部を改訂および拡大したものである。2 名の匿名の査読者から数多くの有益な御指摘を頂いた。ここに記して感謝する。本論文中の瑕疵は全て筆者の責に帰する。

2　印欧祖語における語根構造および母音階梯について

2.1　印欧祖語における語根構造

印欧祖語において音節は音節核にソノリティのピークが現れるように形成されていたと考えられる。ソノリティの階層はソノリティの高い順から母音 > 半母音 > 流音 > 鼻音 > ラリンジャル、*s* > 閉鎖音である。音節核に立ちうることができるのは母音と半母音、共鳴音およびラリンジャルのみであり、それらが音節核に位置する際には成節的となる。

印欧祖語において、語は語根と呼ばれる形態的なまとまりから接辞もしくは母音交替によって派生される[1]。語根は母音 *e* または *o* (および *a*) の有無及び長短に応じて延長階梯、標準階梯、ゼロ階梯という三種類の母音階梯によって区別される。標準階梯は *e* もしくは *o* の母音のいずれかを持つ。一般に前者は *e* 階梯、後者は *o* 階梯と呼ばれる。語根の構造について言及する際には *e* 階梯の形式を挙げることが一般的であり本論文もこれに従う。ゼロ階梯は母音 *e* または *o* を持たないため、ゼロ階梯の語根を持つ形式の多くはその音節構造において音節核が半母音や共鳴音、ラリンジャルに置かれる。そのような形式が持つ成節的な共鳴音やラリンジャルは印欧語の各言語によって異なった現れ方を見せる。以下にラテン語における成節的な共鳴音の現れ方を概観する。

2.2　成節的なソナントのラテン語での現れ方

祖語に再建される成節的なソナントは、ラテン語では直前に母音を介在させて実現される。ソナントが **m* もしくは **n* である場合の母音は *e* 、**r* もしくは **l* の場合は *o* である。すなわちラテン語において以下の表 1 の様に現れる。

表 1 成節的なソナントのラテン語での現れ方

PIE.	Lat.	ラテン語の例	他の語派の形式
**r̥*	*or*	PIE. **mr̥-ti-* > Lat. *mors*「死」	YAv. *mərəti-*「id.」
**l̥*	*ol*	PIE. **tl̥-n-h₂-* > **toln-* > Lat. *tollō*「持ち上げる (1.sg.pres.)」 (語根* *telh₂-*「持ち上げる」)	OIr. *tlenaid*「盗む (3.sg.pres.)」 < **tlinati* < **tl̥-n-h₂-*
**m̥*	*em*	PIE. **deḱm̥* > Lat. *decem*「10」	Ved. *dáśa*「id.」
**n̥*	*en*	PIE. **tn̥-to-* > Lat. *tentus*「伸ばされたもの、糸」	Ved. *tatá-*「ぴんと張られた」

[1] 語根という概念およびその母音交替についての古典的な研究に Benveniste (1935: 147-173) がある。

表 1 から、印欧祖語のゼロ階梯における成節的な *-*n̥*- はラテン語では -*en*- で実現され、例えば、ラテン語における -*on*- という音連続は印欧祖語のゼロ階梯には遡らないということがわかる。上述のように成節的なソナントの現れ方は印欧語の各言語によって異なっており、ラテン語の先史において成節的なソナントに母音が介在されるようになったのは印欧語の各語派が分岐した時期以降のことであると考えられる。

2.3 接辞 *-*ti*- について

2.3.1 印欧諸語における接辞 *-*ti*-

接辞 *-*ti*- は一次派生の接辞として動詞語根の直後に付加される。またそれだけでなく、二次派生として接辞の後に付加されている語形も印欧語の諸言語に在証されている。本論文では語根構造と母音階梯との関係について考察することを目標としているため、考察の対象を一次派生の形式のみに限定する。まず印欧祖語における一次派生の接辞 *-*ti*- の振る舞いについて確認するため、接辞 *-*ti*- を持つ形式が最も豊富に残されているギリシア語とサンスクリットでのその振る舞いを確認する。

2.3.1.1 ギリシア語における接辞 *-*ti*-

ギリシア語では、接辞 *-*ti*- は動作の概念もしくはその動作によって生じた事物を表す動作名詞 (nomina actionis) 、動詞の行為者を表す行為者名詞 (nomen agentis) 、および動詞の動作を遂行するための道具を表す道具名詞として現れている (Schwyzer 1953: 504f.) 。*-*ti*- はギリシア語内部の歴史において歯擦音化して -σι- で現れるが、類推により *t* が復元されている形式も見ることができる。また、接辞 *-*ti*- はとりわけ文法性が女性の動作名詞を作る接辞としてギリシア語で生産的に使われており (Meillet-Vendryes 1979: 395f.)[2]、ホメーロス以降の時代においても頻繁に形成されている。以下に関連する動詞形式と一緒にギリシア語の例を挙げる。以降、本論文におけるギリシア語の動詞形式は特に表記が無い限り一人称単数形である。

[2] "... ont utilisé les deux suffixes [*-*ti*- 及び *-*tu*-, 大西] pour former un nombre considérable de noms d'action." (Meillet-Vendryes 1979: 395)

(1)　動作名詞の例

- Gk. λάξις 「(くじによって) 割り当てられたもの、(土地の) 割り当て (f.)」 cf. Gk. λαγχάνω 「(くじによって) 得る、(神の意志のよって) 得る」
- Gk. κλίσις 「傾いているもの、傾向 (f.)」 cf. Gk. κλίνω 「傾ける、曲げる」
- Gk. κρίσις 「分けること、(区別する) 能力 (f.)」 cf. Gk. κρίνω 「分ける」
- Gk. φθίσις 「滅びること、風化 (f.)」 cf. Gk. φθίω 「朽ちる、すり減る」

(2)　行為者名詞の例

- Gk. μάντις 「賢人、予言者 (m.)」 cf. Skt. *manyate* 「考える (mid.3.sg.)」
- Gk. μάρπτις 「盗人、盗賊 (m.)」 cf. Gk. μάρπτω 「掴む、捉える」

(3)　道具名詞の例

- Gk. ζωμήρυσις 「(スープを盛るための) 柄杓 (f.)」 cf. Gk. ζωμός 「スープ」, Gk. ἀρύω 「(液体を) 注ぐ」
- Gk. τυρόκνηστις, Gk. κνῆστις 「(チーズを削るための) ナイフ (f.)」 cf. Gk. τυρός 「チーズ」, Gk. κνάω 「削る」

以上の例から、Schwyzer (1953: 504f.) が指摘しているように、ギリシア語において接辞 *-*ti*- を持つ形式として残されている形式は、動作名詞および少数の行為者名詞、道具名詞において見つかることがわかる。続いて、ギリシア語の語形から動詞語根の母音階梯について確認する。Schwyzer (1953: 504f.) においては、ギリシア語において接辞 *-*ti*- を持つ形式は一般にゼロ階梯から形成されているが、標準階梯に由来すると考えられる形式も残されていると言及されている。

(4)　ゼロ階梯から形成されていると考えられる例

- Gk. τίσις 「(対価としての) 支払い、報い、 復習 (f.)」
  < PGk. *k^w*i-ti-*
  語根: LIV 379 [3.]*k^w*ey-* 「償いを受ける、罰する」
- Gk. λύσις 「離すこと、放つこと (f.)」
  < Pre-Gk. **lu-ti-* < PGk. **lu(H)-ti-* ?
  語根: LIV 417 **lewH-* 「切り離す、離す」

- Gk. φύξις 「逃げること、避難 (f.) 」
  < Pre-Gk. *p^huk-ti- < PGk. *p^hug-ti-
  語根: LIV 84 *b^hewg- 「逃げ出す」
- Gk. φύσις 「自然、性質、条件 (f.) 」
  < PGk. *p^hu(H)-ti- ?
  語根: LIV 98 *b^hweh$_2$- 「成長する、生じる」
- Gk. χύσις 「流れ、洪水 (f.) 」
  < PGk. *k^hu-ti-
  語根: LIV 179 *ǵ^{h}ew- 「注ぐ、つぐ」
- Gk. βόσις 「食物 (f.) 」
  < Pre-Gk. *bo-ti- < PGk. *g^wh$_3$-ti- ?
  語根: EDG 227f. *g^weh$_3$- 「食べさせる」

(5)　標準階梯から形成されていると考えられる例

- Gk. μῆτις 「知恵 (f.) 」
  < PGk. *meh$_1$-ti-
  語根: LIV 424 *meh$_1$- 「測る」
- Gk. μνῆστις 「記憶、注意 (f.) 」
  < Pre-Gk. *mnēs-ti- < PGk. *mnā-s-ti-?
  語根: LIV 447 *mneh$_2$- 「考える」
- Gk. κτῆσις 「獲得、所有 (f.) 」
  < Pre-Gk. *ktē-ti- < PGk. *kt-eh$_{1/2}$-ti- ?
  語根: ? LIV 618 *tek- 「手を伸ばす、受け取る、手に入れる」
- Gk. πρᾶξις 「行い、業務 (f.) 」
  < PGk. *prā-k-ti- ?
  語根: EDG 1229f. *per(h$_2$)- 「過ぎる、越える」

標準階梯に遡る形式の中には、動詞のアオリストもしくは未来形からの形態的影響を受けた二次的な形式が含まれる (Schwyzer 1953: 505, Irslinger 2002: 186) 。例えば、上記の例 (5) の中の κτῆσις 「獲得」の第一音節の長母音は未来形 κτήσομαι 「得る、勝つ (fut.1.sg.) 」から影響を受けていると考えることができる。他にも、接辞 *-ti- を持つ語形で、動詞からの形態的影響を受けたものとして、以下のような例が挙げられる。

(6)　動詞形式から影響を受けている名詞の例

- Gk. χρῆσις 「使用、用いること (f.) 」
  ← χρήσομαι 「 (宣託を) 問う、用いる; 使う (mid.fut.) 」
  語根: ? LIV 176 *ǵʰer-*[3] 「気に入る・熱望する」
- Gk. πᾶσις 「獲得、所有 (f.) 」
  ← πάσομαι 「得る、獲得する (fut.) 」
  語根: LIV 375 ?*ḱ/kweh₂-* 「手に入れる」
- Gk. συνείδησις 「自我、意識 (f.) 」
  ← συνειδέναι 「認識する、(知識を) 共有する (pf. inf.)」
  語根: LIV 665 **weyd-* 「知る、見る」
- Gk. τάνυσις 「張力、力 (f.) 」
  ← τείνω 「 (力によって) 伸びる」
  語根: LIV 626 **ten-* 「伸びる、広がる」

上記の例 (6) において、χρῆσις 「使用、用いること (f.) 」は未来形 χρήσομαι 「 (宣託を) 問う、用いる; 使う (mid.fut.) 」からの影響を受けた語幹の長母音を示していると考えられる。また、πᾶσις 「獲得、所有 (f.) 」は曲アクセントが示す第一音節の長母音から **pāsi-* < **ḱ/kweh₂-ti-* といったような標準階梯に遡ると考えることも可能であるが、その長母音は未来形 πᾱ́σομαι から形態的に獲得されたとして説明することができる。συνείδησις についても、語根 **weyd-* のゼロ階梯に接辞 **-ti-* が付加された形成と考えるよりは、完了形 συνειδέναι 「認識する、(知識を) 共有する」もしくは未来形 συνειδήσω (fut.1.sg.) から形成されていると考えることでその母音を合理的に説明することができる。同様に、τάνυσις 「張力、力 (f.) 」については印欧祖語に再建される動詞語根 **ten-* に接辞 **-ti-* が付加されて形成されたと考えるよりも、現在形 τανύω や未来形 ἐτάνυσσα などから *tanu-* がギリシア語の中の段階でいわゆる語根のようなものとして認識され、そこから形成された語形として考えることができる。

以上の例から、ギリシア語において接辞 **-ti-* を持つ形式で、関連する動詞から形態的影響を受けていると思われる語形が多く見つかるということがわかった。その背景にはギリシア語において接辞 **-ti-* を持つ形式は、動詞とペアに

[3] Chantraine (1999: 1272-5) 参照。それに対して EDG 1648f. では **gʰreh₁-* という語根が想定されている。

なっていたかあるいは影響を受けやすいような関係であったということが想定される。

接辞 *-ti- の別の特徴として複合語に多く見られるということが挙げられる。複合語の第二要素に頻繁に見られることが古くから知られており、ホメーロスにおいては preverb を第一要素に持つ複合語の第二要素において見ることができる。また、第一要素に接辞 *-ti- を持つ形式については、標準階梯を持つ形式を複合語の第一要素に用いるいわゆる τερψίμβροτος タイプの複合語に見ることができる[4]。

(7)　複合語の第二要素における接辞 *-ti- を持つ例

- Gk. ἔκβασις 「出口 (f.) 」
  < PGk. *°-$g^w\underset{\circ}{m}$-ti-
  語根: LIV 209 *g^wem- 「行く、来る」
- Gk. πάρφασις 「演説、励まし、慰め (f.) 」
  < Pre-Gk. *°-p^ha-ti- < PGk. *°-$p^h\underset{\circ}{h}_2$-ti-
  語根: LIV 69 *$b^h eh_2$- 「話す、言う」

(8)　複合語の第一要素における接辞 *-ti- を持つ例

- Gk. τερψίμβροτος 「人の心を喜ばせる (adj.) 」
  < PGk. *terp-ti-°
  語根: LIV 636 [1]*terp- 「満足する」
- Gk. βωτιάνειρα 「人を養う」
  < PGk. *$g^w eh_3$-ti-°
  語根: EDG 227f. *$g^w eh_3$- 「食べさせる」

2.3.1.2 サンスクリットにおける接辞 *-ti-

サンスクリットにおける *-ti- の現れについては Wackernagel-Debrunner (1954: 622-642) が詳しい。ギリシア語と同じ様に、インド・イラン語派では *-ti- を持つ名詞形式は動詞の抽象的な動作を表す。抽象名詞は具体化され、具体的な事物を表す場合もある。また、行為者および行為の手段の道具を表す名詞も見ら

[4] τερψίμβροτος タイプの複合語については Vine (2004) を参照。

れる点においてもギリシア語と共通している。以下に例として具体化された抽象名詞、行為者名詞、道具名詞を挙げる。

(9)　抽象名詞の例

- Skt. *mr̥ti-* 「死 (f.) 」 < **mr̥-ti-*, cf. YAv. *mərəti-* 「死」
  ← √*mar* 「死ぬ」
- Ved. *śrúti-* 「音 (f.) 」 < **śrú-ti-*
  ← √*śrav* 「聞こえる」
- Ved. *kṣití-* 「定住地 (f.) 」 < **ksi-ti-*, cf. YAv. *hu-šiti-* 「 (神名) (f.) 」
  ← √*kṣay*「住む」

(10)　行為者名詞の例

- Ved. *dhū́ti-* 「揺れ動かす者 (m.) 」< **d^{h}ū-ti-* < **d^{h}uH-ti-*
  ← √*dhav* 「揺する」

(11)　道具名詞の例

- Ved. *r̥ṣṭí-* 「槍 (f.) 」 < **r̥s-ti-*, cf. YAv. *aršti-* 「槍」
  ← √*arṣ-* 「刺す」

母音階梯については、基本的にゼロ階梯から形成された形式が多く見つかるが、標準階梯からの形成も見られる。アクセントについては古い段階では接辞 **-ti-* にアクセントを持つ oxytone の形式が多く見られる一方で、初頭アクセントを持つ barytone の形式も在証されている。このことから、古い段階でパラダイム内部でアクセントの交替があり、ある時点で一般化が別の方向に働いたと想定されている。時代が下るにつれて barytone が生産性を増し、古典期では barytone の形式が大多数となっている (Wackernagel-Debrunner 1954: 631-633) 。

以上の例から、印欧諸語の中で接辞 **-ti-* を最も良く保存している言語であるギリシア語とサンスクリットにおいて、接辞 **-ti-* を持つ形式は動詞の動作もしくはその結果生じた事物を表す動作名詞、動作の行為者を表す行為者名詞、および動作に関連した道具を表す道具名詞として残されているということを確認した。続いて、これらの事実から印欧祖語における接辞 **-ti-* の振る舞いについて確認することにする。

2.3.2　印欧祖語における接辞 *-*ti*-

印欧語の各言語に残されている残存形式から再建される接辞 *-*ti*- の印欧祖語における機能について、古くは Brugmann (1906: 428) に記述が見られる。そこでは接辞 *-*ti*- の第一の機能は抽象名詞を作ることであり、そこから行為者の意味が派生されたことが想定されている[5]。また、近年の接辞 *-*ti*- を取り扱った研究である Reichler-Béguelin (1986) においてもギリシア語やサンスクリットに在証されている例を重視し動作名詞、行為者名詞、道具名詞を形成すると想定されている[6]。

先行研究で想定されているような、印欧祖語における接辞 *-*ti*- の機能は動詞語根からその動作の概念を表す名詞を派生するものであったという考え方を本論でも採用する。その理由は、接辞 *-*ti*- を持つ形式が最も豊富に残されているギリシア語やサンスクリットにおいて動作概念および動作を表す名詞が豊富に残されている一方で、行為者や道具を表す名詞はその数が少ないという点、また、動作概念からその動作の行為者へという意味変化は逆の方向の変化に比べて想定しやすいと考えられる点からである。

2.3.3　*ti* 語幹の母音交替について

接辞 *-*ti*- の印欧祖語における機能は動詞語根からその動作の概念を表す名詞を派生するものであったことを確認した。続いて、一次派生の接辞 *-*ti*- を持つ形式が祖語において示していたと考えられる母音交替およびその母音階梯について確認する。接辞 *-*ti*- を持つ一次派生の形式は印欧祖語において母音交替を示していたことが広く知られている (Rix 1976: 146, Meier-Brügger 2000: 194f., Vine 2004) 。それはインド語派で barytone と oxytone 両者が見られる点 (Ved. *śrúti*-「音 (f.) 」 vs. Ved. *bhr̥tí*-「保護、養育 (f.) 」) 、インド・イラン語派やギ

[5] "…-*ti*- erscheint ganz vorzugsweise in Abstrakta, als primäres und als denominatives Formans. Das Abstraktum wurde durch Personifikation zur Bezeichnung des Trägers eines Vorgangs…" (Brugmann 1906: 428)

[6] Reichler-Béguelin (1986: 167) において "En fonction primaire, *-*ti*- constitue essentiellement des noms d'action, mais aussi, de façon remarquable, des noms d'agent et des noms d'instrument…" と述べられているが、さらに加えて数詞の集合名詞、名詞派生の名詞 (女性形、身体部位など) および代名詞派生の名詞を二次的に形成するとも述べられている。本論文では、動詞語根の直後に接辞 *-*ti*- が付加されている一次派生の形式 (動作名詞、行為者名詞、道具名詞) のみを扱い、数詞の集合名詞、名詞派生の名詞 (女性形、身体部位など)、代名詞派生の名詞といった二次的な接辞を伴ったとされる形式については扱わない。

リシア語で単数属格の接辞が標準階梯を示している点[7] (Skt. *gátes*「行くこと (gen. sg.)」< *g^wm̥-téi-s*、Gk. βάσεως「歩み (gen. sg.)」< *-*ēos* < *-*ēy-os*[8]) などから語根と接辞の母音階梯が強形と弱形で交替する proterokinetic タイプの母音交替が想定されている[9]。また、語根はインド・イラン語派、ギリシア語など幅広い語派でゼロ階梯に遡る形式が多く見つかるため、かつて *e* 階梯とゼロ階梯の間で交替していた語根は印欧祖語の段階でゼロ階梯に一般化されたと仮定されている (Rix 1976: 146, Meillet-Vendryes 1979: 365, Irslinger 2002, Vine 2004)[10]。

動詞語根のゼロ階梯を説明するため、接辞 *-*ti*- は印欧祖語の極めて古い段階では複合語の第二要素でのみ用いられ、単純語における接辞 *-*tu*- と交替していたとする考え方がある[11]。確かに、第二要素に接辞 *-*ti*- を持つ複合語の中には、接辞 *-*tu*- を持つ対応する単純語を持つ形式も見られるが (Wackernagel-Debrunner 1954: 634)、仮にこの接辞が究極的に複合語起源であったとしても、祖語の段階で既に接辞 *-*ti*- は単純語でも用いられていたと考えられる。

2.4 ラテン語における接辞 *-*ti*-

本論文で対象とする語形は動詞語根の直後に接辞 *-*ti*- が加えられた一次派生の形式である。著者が収集したラテン語の形式は以下の表 2 の 25 例である。

---

[7] *ti* 語幹が proterokinetic タイプの母音交替を示していたことの根拠として一般に引用されるオスク語の属格単数語尾 *-eys* は接辞 *-*i*- を持つ形式からの類推とも考えることができるため (cf. *o* 語幹属格単数語尾 *-eys* ← *i* 語幹属格単数語尾 *-*ei-s* が広がっている)、*ti* 語幹が proterokinetic のアプラウトを示していたことに対する証拠としては使えない。

[8] ギリシア祖語以降の段階で *i* 語幹属格単数語尾は *-*o*- を獲得している。また、接辞はギリシア語の一部の方言の弱形において *-*ēy*- に由来する形式を示している。この接辞の長母音は位格単数 *-*ēy* からの類推で獲得されたと一般に説明される (Rix 1976: 146, Meier-Brügger 2000: 194, Vine 2004: 357)。

[9] 印欧祖語において、thematic vowel を持たない athematic noun は語根、接辞、語尾の母音の階梯およびアクセントの位置に応じて acrostatic, proterokinetic, hysterokinetic, amphikinetic の 4 つの母音交替のタイプのいずれかに属していたことが想定されている (Beekes 1995: 174-176, Fortson 2004: 107-110, Meier-Brügger 2000, 188-201)。以下に 4 つの母音交替のタイプを Fortson (2004: 108) を一部改変して示す。

- Acrostatic (1)　強形: R(*ó*)-S(zero)-E(zero)　弱形: R(*é*)-S(zero)-E(zero)
- Acrostatic (2)　強形: R(*é́*)-S(zero)-E(zero)　弱形: R(*é*)-S(zero)-E(zero)
- Proterokinetic　強形: R(*é*)-S(zero)-E(zero)　弱形: R(zero)-S(*é*)-E(zero)
- Hysterokinetic　強形: R(zero)-S(*é*)-E(zero)　弱形: R(zero)-S(zero)-E(*é*)
- Amphikinetic　強形: R(*é*)-S(*o*)-E(zero)　弱形: R(zero)-S(zero)-E(*é*)

[10] “Vollstufe der Wurzel (Nom. Akk.) ist wohl schon spät-idg. durch Schwundstufe ersetzt. (Rix 1976: 146)”

[11] Meillet (1925) および、近年では Olsen & Rasmussen (1999) が接辞 *-*ti*- の起源をアクセントを持たない thematic vowel に求めている。

表 2 一次派生の接辞 *-ti- を持つラテン語の語形

	語幹	語形	意味	出典	品詞	性
1	*arti-*	*ars, -rtis*	技術、芸術	Pl.+	名詞	f.
2	†*fēti-*	*fētiālis*	伝令僧 (宣戦布告を司る聖職者の集団の名称)	Varro+	名詞	m.
3	*fonti*	*fōns, fontis*	泉	Naev.+	名詞	m.
4	*forti-*	*fors, -rtis*	幸運、運	Pl.+	名詞	f.
5	*fūti-*	*fūtis*	水差し	Varro	名詞	f.
6	*genti-*	*gēns, gentis*	民族、一族	Naev.+	名詞	f.
7	*hosti-*	*hostis*	見知らぬ人、敵	Lex XII+	名詞	m./f.
8	*liti-*	*līs, -ītis*	口論、争い	Lex XII+	名詞	f.
9	*menti-*	*mēns, -ntis*	精神	Naev.+	名詞	f.
10	*messi-*	*messis*	刈り入れ、収穫	Pl.+	名詞	f.
11	*mēti-*	*mētior, -īrī*	測る	Pl.+	動詞	
12	*mīti*	*mītis*	甘い、熟した、やわらかい	Pl.+	形容詞	
13	*monti-*	*mōns, montis*	山	Naev.+	名詞	m.
14	*morti-*	*mors, -rtis*	死	Naev.+	名詞	f.
15	†*nati-*	*natinor, -ārī*	忙しい状態である	Fest.	動詞	
16	*quiēti-*	*quiēs, quiētis*	休息、休憩	Pl.+	名詞	f.
17	*rati-*	*ratis*	いかだ; 船	Naev.+	名詞	f.
18	*resti-*	*restis*	ひも、ロープ	Pl.+	名詞	f.
19	*sati-*	*satis*	十分に	Naev.+	副詞	
20	*siti-*	*sitis*	渇き	Pl.+	名詞	f.
21	*sorti-*	*sors, -rtis*	くじ	Pl.+	名詞	f.
22	*stati-*	*statim*	一定して、規則正しく	Pl.+	副詞	
23	*vecti-*	*vectis*	(木製または金属の) 棒、レバー	Cato+	名詞	m.
24	*vesti-*	*vestis*	服、衣装	Andr.+	名詞	f.
25	*vīti-*	*vītis*	ブドウの木	Enn.+	名詞	f.

印欧祖語の段階での接辞 *-ti- の機能は一義的には動詞語根からその動作の概念を表す名詞を派生するものであり、さらにそこから行為者・道具の意味に変化していったと考えられる。ラテン語およびイタリック語派においても、動詞語根から接辞 *-ti- を伴って名詞を派生させた形式が残されているが、それらの

中には動詞の概念や動作を表すのではなく、具体化された事物を表す形式が多い。また、行為者、道具を表す形式はごくわずかしか見られない。上記の収集した例の中からそれらの形式を挙げる。以下に挙げる形式は名詞については語幹、動詞については不定形である。副詞はそのままの語形を挙げる[12]。

(12) 接辞 *-*ti*- を持つラテン語の抽象名詞

A. 動詞の概念、動作を表す形式

- Lat. *morti*- 「死」 < *$m\underset{\circ}{r}$-*ti*- もしくは **mor-ti*-, 語根: LIV 439 **mer*- 「死ぬ」
- Lat. *quiēti*- 「休息」 < *k^wyeh$_1$-*ti*-, 語根: LIV 393 *k^wyeh$_1$*- 「休む」

B. 具体化したものを表す形式

- Lat. *resti*- 「ひも、ロープ」 < **resg-ti*-, 語根: LIV 507 **resg*- 「編む」
- Lat. *monti*- 「山」 < **mon-ti*-, 語根: LIV 437 ?3.**men*- 「突き出る」

(13) 接辞 *-*ti*- を持つラテン語の行為者名詞

- Lat. *fētiāli*- 「伝令僧 (聖職者の一種) 」 ← Pre-Lat. **fēti*- 「据える(人)？」 < *d^heh$_1$-*ti*-, 語根: LIV 136 *d^heh$_1$*- 「置く」

(14) 接辞 *-*ti*- を持つラテン語の道具名詞

- ? Lat. *vesti*- 「服、衣装」 < **wes-ti*-「着るもの」, 語根: LIV 692 1.**wes*-「服を着る、覆う」

動作の抽象的な概念を表す形式に比べて、具体的な事物を表す形式が多いのは、印欧祖語、もしくは印欧語のそれぞれの言語で抽象的な意味が具体化するという意味変化を受けた結果であると考えられる。また、行為者や道具を表す名詞がラテン語において極めて少ないことは、それらが接辞 *-*ti*- の一義的な機能ではなく、意味変化により派生したという想定とも合致している。母音階梯について、接辞 *-*ti*- を持つラテン語の形式は語根のゼロ階梯から形成されると

[12] 語源について議論があり接辞 *-*ti*- を伴っているか定かでない形式は除外した。具体的には、Lat. *anas* 「アヒル (f.Pl.+, gen.sg. *anatis*) 」、*classis* 「(社会的) 階級、軍隊、艦隊 (f.Andr.+) 」、*festīnō*「急がせる、急ぐ」(Pl.+, inf. *-āre*) ← **festi-*, *lēns* 「ヒラマメ、レンズマメ (f.(m.)Cato+, gen.sg. *lentis*) 」、*natis* 「尻、臀部 (f.Pl+.) 」、*pestis* 「伝染病、ペスト；死 (f.Pl.+) 」、*puls* 「粥 (の一種) (f.Cato+, gen.sg. *pultis*) 」、*rēte*/*rētis*「網、罠 (n./f.Pl.+) 」、*saltem*「少なくとも、いずれにせよ (adv.Pl.+) 」、*trīstis*「悲しい、悲しみに沈んだ (adj.Pl.+) 」、*tussis*「咳 (f.Ter.) 」、*vestibulum*「前庭、入り口 (n.Pl.+) 」、*vitium*「欠点、失敗 (n.Lex XII+) 」である。これらの語形についての議論は大西 (2011) を参照されたい。

されている (Sommer 1914: 369, Leumann 1977: 344f., Irslinger 2002: 186f.)[13]。しかし、上記の例を見てもわかるように、必ずしも語根の母音階梯がゼロ階梯に遡る形式だけが見られるのではなく、ゼロ階梯に遡るとは思えない形式も数多く見られる。この問題については次節以降で論ずる。

他の語派に比べてイタリック語派に特徴的であるのは、*-ti(y)ōn-/*-tīn- に由来する接辞 *-ti(y)ōn- を持つ形式が多く見られることである (Leumann 1977: 344f., Meillet-Vendryes 1979: 365)[14]。ラテン語では接辞 *-ti- に代わって接辞 *-ti(y)ōn- が動作名詞を作る接辞として生産的に用いられており、接辞 *-ti- の名残りとしてラテン語に残されている形式は上記の少数の名詞と名詞由来動詞および単数対格が副詞化した形式のみである (Meillet-Vendryes 1979: 365, Weiss 2009: 316) 。

(15)　接辞 *-ti- を持つラテン語の名詞由来動詞および副詞

- Lat. *mētīrī* 「測る」 ← Pre-Lat. **mēti-* 「測ること」 < **meh₁-ti-*, 語根: LIV 424 **meh₁-* 「測る」
- Lat. *natinārī* 「忙しい状態である」 ← Pre-Lat. **gnāti-* 「生産」 < **ǵn̥h₁-ti-*, 語根: LIV 163 **ǵenh₁-* 「産む、生産する」
- Lat. *statim* 「一定して、規則正しく (adv.) 」 ← Pre-Lat. **stati-* 「一定」 < **sth₂-ti-*, 語根: LIV 590 **steh₂-*「立つ」

---

[13] Reichler-Béguelin (1986) は接辞 *-ti- を持つラテン語の形式を動作名詞、道具名詞、形容詞、その他 (代名詞起源など) で分類しているが、この分類には接辞 *-ti- ではなく接辞 *-t- に遡るであろう形式が含まれている。ラテン語および印欧祖語における接辞 *-t- については Vijūnas (2009) を参照。

[14] イタリック語派の中で、ラテン語では Lat. *āctiō*「動作 (nom.sg.) 」, *āctiōnis* (gen.sg.), *āctiōni* (dat.sg.) のように、強形の長母音 *-iō-* が一般化された接辞 *-ti(y)ōn- (← *-ti(y)ōn-/*-tīn-) が用いられている。その一方、同じイタリック語派に属するウンブリア語では、強形の長母音の一般化を受けていない弱形の接辞 *-tīn- も観察することができる (Umb. **natine**「貴族の一家 (abl.sg.) 」< **ǵn̥h₁-tīn-*) 。また、同じくイタリック語派に属するオスク語においても接辞 *-i(y)ō- が *-īn- と交替していたことを示す例が発見されており (Osc. **tríbarakkiuf**「建造物 (nom.sg.) 」< **trēb-ark-i(y)ōn-* vs. Osc. **tanginúd**「意見、議決 (abl.sg.) 」< **tn̥g-īn-*) 、接辞 *-ti(y)ōn- についても同様に、オスク語とウンブリア語は弱形 *-tīn- との交替を保存していたことが想定される。拡張された接辞の起源については、所有の意味を伴ういわゆる 'Hoffmann suffix' **-Hon-* ~ **-Hn-* がその起源の 1 つであると解釈できる (Hoffmann suffix については Hoffmann 1955 参照。例 Lat. *restis* 「縄、ひも」 < **resg-ti-* → Lat. *restiō* 「縄を売る人 (Pl.+) 」 < **resg-ti-Hon-*) 。拡張された接辞 *-ti(y)ōn- ~ -tīn- についての近年の研究は Nussbaum (2005, 2006) が詳しい。そこでは *-i(y)ōn-/*-īn- < *-iHon-/*-iHn- について、Hoffmann suffix だけでなく *o* 語幹から接辞の交替によって派生した *i* 語幹名詞の具格 **-ih₁* を起源にもつ **-ih₁-(o)n-* に遡る形式が存在することを指摘している。また、 *-ti(y)ōn- について、ラテン語で *-ti- と *-ti(y)ōn- 両方持つ形式がある一方で、*-ti- を持つ形式が在証されていないにもかかわらず *-ti(y)ōn- を持つ形式が在証されていることなどを考慮に入れ、*-tum → *-ti(y)ōn- というラテン語内部での派生のプロセスを想定している。

2.5　第二章のまとめ

第二章では印欧祖語における語根構造、ラテン語における成節的ソナントの反映をまず確認し、続いて接辞 *-*ti*- を持つ形式が最も豊富に残されているギリシア語およびサンスクリットにおけるその振る舞いと印欧祖語に再建される接辞 *-*ti*- の機能、およびラテン語におけるその反映について確認した。印欧祖語に再建される *-*ti*- の機能は動詞語根から動作の行為もしくはその概念を表す動作名詞を作ると考えられる。そして印欧祖語もしくはその後の段階で意味変化によって具体的な事物、行為者もしくは道具を表す様になったと考えられる。ギリシア語やサンスクリットではそれらが多く残されている一方で、ラテン語では接辞 *-*ti(y)ōn*- を持つ形式に置き換えられており数は多く残されていない。動作の行為もしくは概念を表す形式、およびそれらが具体化された形式が少数見つかるが、行為者もしくは道具を表す形式はほとんど見られない。母音階梯については他の語派の形式同様、動詞語根のゼロ階梯から作られると説明されている。以降、このことを踏まえて、ラテン語に見られる形式の語根構造と母音階梯について先行研究を含めて考察することとする。

3　先行研究

語根構造が特定の形式もしくは意味と関係することに着目した研究は昔より知られており、Schindler (1972) は語根名詞が語根の構造によって二種類の機能に分かれることを発見した。また、Irslinger (2002) は *-*ti*- を持つ形式でケルト諸語に在証されている形式を 18 例収集し、それらを母音階梯に応じて分類している。ここでは後のラテン語の形式の分類との整合性を取る為に以下のカバータームを用いて表 3 のように分類し、Irslinger (2002: 229f.) を一部改変して表 4 のようにまとめる (C = 任意の子音、T = 閉鎖音もしくは *s* 、R = *l*, *r*、N = *n*, *m*、H = ラリンジャル、W = *y*, *w*)[15]。

[15] 表 4 の分類は次節以降のラテン語の分類との整合性を取れる様に発表者が作成したものである。OIr. *tréith* 「弱い、臆病な (adj.) 」 < **trey(H)-ti-* ? (cf. LIV 632 **terh₁-* 「穴をあける、摩擦する」) はその再建が確実とは言えないため例から除外した (Zair 2012: 234 参照) 。

表 3 語根の分類

	語根構造	説明
i	CeT-	語根末が閉鎖音もしくは *s* のみで終わる語根
ii	CeR-	語根末が流音のみで終わる語根
iii	CeN-	語根末が鼻音のみで終わる語根
iv	CeH-	語根末がラリンジャルのみで終わる語根
v	CeW-	語根末が半母音のみで終わる語根
vi	CeWH-	語根末が半母音 + ラリンジャルで終わる語根
vii	CeNH-	語根末が鼻音 + ラリンジャルで終わる語根
viii	CeRT-	語根末が流音 + 閉鎖音もしくは *s* で終わる語根
ix	CeWT-	語根末が半母音 + 閉鎖音もしくは *s* で終わる語根
x	CeHT-	語根末がラリンジャル+ 閉鎖音もしくは *s* で終わる語根
xi	CeTT-	語根末がその他の子音連続で終わる語根

表 4 ケルト語派の語形の分類と母音階梯

	語根構造	ケルト語派の語形		
		ゼロ階梯	標準階梯	合計
i	CeT-		• MIr. *icht* 「種族、民族」 < **yek-tV-* (cf. LIV 311 **yek-* 「話す」)	1
ii	CeR-	• OIr. *ailt* 「高さ、高台 (f.)」 < **h_2l̥-ti-* (cf. LIV 262 **$h_2$el-* 「養う、引き上げる」) • MIr. *clith* 「密集した、押し込められた (adj.)」 < **kl̥-ti-* (cf. LIV 323 **kel-* 「暖かくなる」)		2
iii	CeN-			
iv	CeH-	• OIr. *laith* 「ビール、液体」 < **lh̥$_2$-ti-* (cf. LIV 401 **leh$_2$-* 「注ぐ」) • OIr. *maith* 「良い (adj.)」 < **mh̥$_2$-ti-* (cf. LIV 382 ?**meh$_2$-* 「時期を得ている / 印を与える」) • *-buith* 「— であること」 < **-bhu-ti-* (cf. LIV 98 **b^{h}weh$_2$-* 「成長する、生じる」)	• OIr. *áith* 「暖炉 (f.)」< **$h_2$eh$_1$-ti-* (cf. LIV 257 **$h_2$eh$_1$-* 「熱い状態である」) • ? *fáith* 「興奮、恍惚」 < **weh$_2$-ti-* (cf. Matasović 2009: 404 **weh$_2$-* 「刺激を受けた、熱狂している」) • OIr. *táid* 「泥棒 (m.)」< **teh$_2$-ti-* (cf. LIV 616 **teh$_2$-* 「盗む」) • OIr. *féith* 「繊維、腱 (f.)」 < **wey(H)-ti-* ? (cf. LIV 695 **wyeh$_1$-* 「巻き付ける、くるむ」)	7
v	CeW-	• *sruith* 「年老いた; 年老いた男 (adj.; m.)」 < **s(t)ru-ti-* (cf. LIV 605 ?**strew-* 「撒く」)		1

vi	CeWH-			
vii	CeNH-			
viii	CeRT-	• OIr. *mlicht* 「牛乳」 < *h_2m̥lǵ-ti- (cf. LIV 279 *$h_2$melǵ- 「搾乳する」)		1
ix	CeWT-	• OIr. *-cuis* 「根拠、原因」 < *(s)kud-ti- (cf. LIV 560 *(s)kewd- 「促進する」) • MIr. *duis* 「烏; (死を司る女神) 」 < *dus-ti- (cf. LIV 125 *dews- 「必要とする、不足する」) • MIr. *ficht* 「鋭い、尖った (adj.)」 < *wik-ti- (cf. LIV 670 *weyk- 「克服する、打ち負かす」) • MIr. *ruis* 「にわとこ (f.) 」 < *(h_1)rud^h-ti- (cf. LIV 508 *(h_1)rewd^h- 「赤くする」)		4
x	CeHT-	• MIr. *cais* 「憎しみ、愛情」 < *ḱh̥$_2$d-ti- (cf. LIV 319 *ḱeh$_2$d- 「心が動揺している」)		1
xi	CeTT-			
	合計	12	5	17

表 4 から、全 17 例の形式の中で *e* 階梯を持つ形式が 5 例見つかり、それらは、語根末がラリンジャルのみで終わる語根 CeH- が 4 例、語根末が閉鎖音もしくは *s* のみで終わる語根 CeT- が 1 例であるということがわかる。ここから言えることは、ケルト語派の語形は一律に語根のゼロ階梯に遡るのではなく、標準階梯から形成されている形式があり、それらが CeH- および CeT- という特定の語根構造を持っているということである。次節以降、この調査を背景にしてラテン語の語形について調査を行うこととする。

4 ラテン語の語形の分類

収集したラテン語の形式について、前節の表 3 を用いて分類する。以下 (i) - (xi) に分類された語根に対応するラテン語の語形、ラテン語からの再建のみにより想定される祖形、及び推測される印欧祖語における母音階梯を以下にそれぞれ示す。

(i)　語根末が閉鎖音もしくは *s* のみで終わる語根 (CeT-)

・Lat. *hosti-* 「見知らぬ人、敵」 < *g^hos-ti-*

語根: LIV 198 ?1.*$g^{(w)h}$es-* 「食べる」

母音階梯: *o* 階梯

・Lat. *messi-* 「刈り入れ、収穫」 < *met-ti-*

語根: LIV 442 ?1.*met-* 「刈る、収穫する」

母音階梯: *e* 階梯

・Lat. *vectis* 「 (木製または金属の) 棒、レバー」 < *weǵ^h-ti-*

語根: LIV 661 *weǵ^h-* 「浮かぶ; 行く」

母音階梯: *e* 階梯

・Lat. *vesti-* 「服、衣装」 < *wes-ti-*

語根: LIV 692 1.*wes-* 「服を着る、覆う」

母音階梯: *e* 階梯

(ii)　語根末が流音のみで終わる語根 (CeR-)

・Lat. *arti-* 「技術、芸術」 < *h_2r̥-ti-*[16] もしくは *$h_2$er-ti-*

語根: LIV 269 1.*$h_2$er-* 「合う、 (つなぎ) 合わさる」

母音階梯: ゼロ / *e* 階梯[17]

・Lat. *forti-* 「幸運、運」 < *b^hor-ti-* もしくは *b^hr̥-ti-*

語根: LIV 76 *b^her-* 「運ぶ」

母音階梯: ゼロ / *o* 階梯

・Lat. *morti-* 「死」 < *mr̥-ti-* もしくは *mor-ti-*

語根: LIV 439 *mer-* 「死ぬ」

母音階梯: ゼロ / *o* 階梯

・Lat. *sorti-* 「くじ」 < *sr̥-ti-* もしくは *sor-ti-*

語根: LIV 534 2.*ser-* 「結び付ける」

母音階梯: ゼロ / *o* 階梯

---

[16] この再建形を想定する立場について Schrijver (1991: 68) を参照。 "... *ars* probably reflects *h_2r̥-ti-, as derivatives in -*ti-* generally have a zero grade root (Meillet 1937: 273)" (Schrijver 1991: 68)

[17] 母音階梯におけるスラッシュの表記は「もしくは」を表す。

(iii)　語根末が鼻音のみで終わる語根 (CeN-)

・Lat. *menti-* 「精神」 < *$m\underset{\circ}{n}$-ti-* もしくは **men-ti-*

語根: LIV 435 [1.]**men-* 「考える」

母音階梯: ゼロ / *e* 階梯

・Lat. *monti-* 「山」 < **mon-ti-*

語根: LIV 437 [?3.]**men-* 「突き出る」

母音階梯: *o* 階梯

(iv)　語根末がラリンジャルのみで終わる語根 (CeH-)

・Lat. *fētiāli-* 「伝令僧」 ← Pre-Lat. **fēti-* < **$d^h eh_1$-ti-*

語根: LIV 136 **$d^h eh_1$-* 「置く」

母音階梯: *e* 階梯

・Lat. *mētīrī* 「測る」 ← Pre-Lat. **mēti-* 「測ること」 < **meh_1-ti-*

語根: LIV 424 **meh_1-* 「測る」

母音階梯: *e* 階梯

・Lat. *quiēti-* 「休息、休憩」 < **$k^w yeh_1$-ti-*

語根: LIV 393 **$k^w yeh_1$-* 「休む」

母音階梯: *e* 階梯

・Lat. *rati-* 「いかだ; 船」 < **$h_1 rh_1$-ti-*?

語根: LIV 251 [2.]**$h_1 reh_1$-* 「漕ぐ」

母音階梯: ゼロ階梯

・Lat. *satis* 「十分な (adv.) 」 < **sh_2-ti-*「満足」

語根: LIV 520 [1.]**$seh_2(y)$-* 「一杯になる」

母音階梯: ゼロ階梯

・Lat. *statim* 「一定して、規則正しく (adv.) 」 < **sth_2-ti-*

語根: LIV 590 **$steh_2$-* 「立つ」

母音階梯: ゼロ階梯

・Lat. *vīti-* 「ブドウの木」 < **wih_1-ti-*

語根: LIV 695 **$wyeh_1$-* 「巻き付ける、くるむ」

母音階梯: ゼロ階梯

(v)　語根末が半母音のみで終わる語根 (CeW-)

・Lat. *fūtis* 「水差し」 < *g^hew-ti-?

語根: LIV 179 *$ǵ^h$ew- 「注ぐ」

母音階梯: ゼロ階梯

・Lat. *siti-* 「渇き」 < *d^hg^{wh}i-ti-

語根: LIV 150 *d^hg^{wh}ey- 「(暑さで) 衰える, 滅びる」

母音階梯: ゼロ階梯

(vi)　語根末が半母音 + ラリンジャルで終わる語根 (CeWH-)

・Lat. *līti-* 「口論、争い」 < *liH-ti-?

語根: *sleyH-? 「争う、訴える」

母音階梯: ゼロ階梯

・Lat. *mīti-* 「甘い、熟した」 < *mih_1-ti-

語根: LIV 428 2.*meyH- 「成長する」

母音階梯: ゼロ階梯

(vii)　語根末が鼻音+ラリンジャルで終わる語根 (CeNH-)

・Lat. *fonti-* 「泉」 < *fon-ti-

語根: LIV 144 1.*d^henh_2- 「流れていく、姿をくらます」

母音階梯: *o* 階梯

・Lat. *genti-* 「民族、一族」 < *ǵen(h_1)-ti- もしくは *ǵn̥-ti-

語根: LIV 163 *ǵenh_1- 「産む、生産する」

母音階梯: ゼロ / *e* 階梯

・Lat. *natinārī*[18] 「忙しい状態である」 ← Pre-Lat. *gnāti- 「忙しさ」 < *ǵn̥h_1-ti- 「生産」

語根: LIV 163 *ǵenh_1- 「産む、生産する」

母音階梯: ゼロ階梯

[18] Lat. *natinārī* の第一音節と第二音節の母音の長短の表記について Walde-Hofmann (1938-54: 146) はいずれも長母音で表記しているが、この語形は Fest. 166 でのみ現れるハパックスであり、初頭音節と第二音節の母音の長短について決定することはできない (de Vaan 2008: 401f. 参照) 。

(viii)　語根末が流音 + 閉鎖音もしくは s で終わる語根 (CeRT-)
・該当無し

(ix)　語根末が半母音 + 閉鎖音もしくは s で終わる語根 (CeWT-)
・該当無し

(x)　語語根末がラリンジャル+ 閉鎖音もしくは s で終わる語根 (CeHT-)
・該当無し

(xi)　語根末がその他の子音連続で終わる語根 (CeTT-)
・Lat. *resti-* 「ひも、ロープ」 < **resg-ti-*
　語根: LIV 507 **resg-* 「編む、組む」
　母音階梯: *e* 階梯

これらの分類をまとめると以下の表 5 になる。また、ケルト語派の分類の状況とまとめた表が以下の表 6 である。

表 5 ラテン語の語形の分類と母音階梯

	語根構造	ラテン語の語形			
		ゼロ階梯	ゼロ階梯もしくは標準階梯	標準階梯	合計
i	CeT-			• *messi-* 「刈り入れ、収穫」 < **met-ti-* (cf. LIV 442 ?1.**met-* 「刈る」) • *vecti-* 「 (木製または金属の) 棒、レバー」 < **weǵʰ-ti-* (cf. LIV 661 **weǵʰ-* 「浮かぶ; 行く」) • *hosti-* 「見知らぬ人、敵」 < **gʰos-ti-* (cf. LIV 198 ?1.**g(ʷ)ʰes-* 「食べる」) • *vesti-* 「服、衣装」 < **wes-ti-*, (cf. LIV 692 1.**wes-* 「服を着る、覆う」)	4

ii	CeR-		• *arti-* 「技術、芸術」 < *h_2r-ti- or *$h_2$er-ti- (cf. LIV 269 1.*$h_2$er-「合う、（つなぎ）合わさる」) • *forti-* 「幸運、運」 < *b^hor-ti- or *b^hr̥-ti- (cf. LIV 76 *b^her-「運ぶ」) • *morti-* 「死」 < *mr̥-ti- or *mor-ti- (cf. LIV 439 *mer-「死ぬ」) • *sorti-* 「籤」 < *sr̥-ti- or *sor-ti- (cf. LIV 534 2.*ser-「結び付ける」)		4
iii	CeN-		• *menti-* 「精神」 < *mn̥-ti- or *men-ti- (cf. LIV 435 1.*men-「考える」)	• *monti-* 「山」 < *mon-ti- (cf. LIV 437 ?3.*men-「突き出る」)	2
iv	CeH-	• *vīti-* 「ブドウの木」 < *wih_1-ti- (cf. LIV 695 *wyeh_1-「巻き付ける、くるむ」) • *rati-* 「いかだ、船」 < *ra-ti- < *h_1r̥h_1-ti-? (cf. LIV 251 2.*$h_1$reh_1-「漕ぐ」) • *satis* 「十分な」 ← †*sati-* 「満ちること、満足」 < *sa-ti- < *sh̥$_2$-ti- (cf. LIV 520 1.*seh_2(i)-「一杯になる」) • *statim* 「一定して、規則正しく」 ← †*stati-* 「一定」 < *sta-ti- < *sth̥$_2$-ti- (cf. LIV 590 *steh_2-「立つ」)		• *fētiālis* 「伝令僧」 ← †*fēti-* < *d^heh_1-ti-, (cf. LIV 136 *d^heh_1-「置く」 • *mētīrī* 「測る」 ← †*mēti-* 「測定」 < *meh_1-ti- (cf. LIV 424 *meh_1-「測る」) • *quiēti-* 「睡眠、休息」 < *k^wieh_1-ti- (cf. LIV 393 *k^wyeh_1-「休む」)	7
v	CeW-	• *siti-* 「渇き」 < *d^hg^{wh}i-ti- (cf. LIV 150 *d^hg^{wh}ey-「(暑さで) 衰える, 滅びる」)		• *fūti-* 「水差し」 < *g^hew-ti-? (cf. LIV 179 *ǵ^{h}ew-「注ぐ」)	2
vi	CeWH-	• *līti-* 「訴訟; 論争」 < *liH-ti- (cf. de Vaan 2008: 345f. *sleyH-?「争う、訴える」) • *mīti-* 「甘い、熟した、柔らかい」 < *miH-ti- (cf. LIV 428 2.*meiH-「成長する、熟す」)			2

vii	CeNH-	• *natinārī* 「忙しい状態である」 ← †*(g)nāti-* 「仕事、生産」 < *$ǵ\underset{\circ}{n}h_1$-ti-* (cf. LIV 163 *$ǵenh_1$-* 「産む、生産する」)	• *genti-* 「民族、一族」 < *$ǵenh_1$-ti-* or *$ǵ\underset{\circ}{n}$-ti-* (cf. LIV 163 *$ǵenh_1$-* 「産む、生産する」)	• *fonti-* 「泉」 < *$d^h onh_2$-ti-*, (cf. LIV 144 1.*$d^h enh_2$-* 「流れていく、姿をくらます」)	3
viii	CeRT-				
ix	CeWT-				
x	CeHT-				
xi	CeTT-			• *resti-* 「紐、ロープ」 < **resg-ti-* (cf. LIV 507 **resg-* 「編む、組む」)	1
	合計	8	6	11	25

表 6 ラテン語とケルト語派の語形の分類

	語根	ラテン語の形式				Irslinger (2002)		
		ゼロ階梯	標準階梯またはゼロ階梯	標準階梯	合計	ゼロ階梯	標準階梯	合計
i	CeT-			4	4		1	1
ii	CeR-		4		4	2		2
iii	CeN-		1	1	2			
iv	CeH-	4		3	7	3	4	7
v	CeW-	1		1	2	1		1
vi	CeWH-	2			2			
vii	CeNH-	1	1	1	3			
viii	CeRT-					1		1
ix	CeWT-					4		4
x	CeHT-					1		1
xi	CeTT-			1	1			
	合計	8	6	11	25	12	5	17

5　考察

5.1　予測に合致する形式

表 5 におけるラテン語の状況に特徴的であるのは、ゼロ階梯と標準階梯のいずれに遡るかが決定できない形式が 6 例見られるということである。これは表 1 で確認したように、印欧祖語における成節的な流音 *R はラテン語において *o*R で実現されるため、ラテン語に見られる *-ol/r-* の音連続が語根のゼロ階梯に遡るのか *o* 階梯に遡るのか決定できないためである。語根末が流音で終わる CeR- という構造の語根は 4 例の内 3 例 (Lat. *fors*, *mors*, *sors*) がゼロ階梯または *o* 階梯から導かれる形式を示しており、どちらに遡るのか決定できない。同様に、成節的な鼻音はラテン語で *e*N で実現されており、ラテン語の *-en/m-* の音連続はゼロ階梯に遡るのか *e* 階梯に遡るのか決定できない。これらの語形は他の語派のゼロ階梯から導かれている形式 (Ved. *mŕ̥ti-* 「死」、*bhr̥tí-* 「運搬、介護」など) との整合性を重視し一般にゼロ階梯に由来すると考えられている。

その一方、語根のゼロ階梯から導かれる形式は 8 例あり、これらは印欧祖語の段階で生じた語根のゼロ階梯の一般化の結果を引き継いでいると考えられる。それらは CeH-, CeW-, CeWH- もしくは CeNH- という構造の語根を持っている。仮に上記の CeR- や CeN- の語根を持つ形式がゼロ階梯に由来するとした場合、ケルト諸語の状況と同様にラテン語においても幅広い構造の語根においてゼロ階梯に由来する形式が見つかることになる。更に、表 6 において CeT- または CeTT- の語根構造でゼロ階梯に由来する形式が見つからない点もケルト諸語と状況は同じである。(vii) の CeNH- という構造を持つ語根の形式は、仮に上記の CeR- や CeN- の語根を持つ形式がゼロ階梯に由来するとした場合、ケルト諸語の状況と同様にラテン語においても幅広い構造の語根においてゼロ階梯に由来する形式が見つかることになる。更に、表 6 において CeT- または CeTT- の語根構造でゼロ階梯に由来する形式が見つからない点もケルト諸語と状況は同じである。(vii) の CeNH- という構造を持つ語根の形式は、ゼロ階梯に遡る形式が 1 例、ゼロ階梯と標準階梯の間で曖昧である形式が 1 例、標準階梯に遡る形式が 1 例見つかる。この構造をした語根については、標準階梯に遡ると考えられる Lat. *fonti-*「泉」が見つかる一方で (この語形については次節以降で詳しく考察する) 、規範的なゼロ階梯に遡ると考えられる形式 Lat. *natinārī* 「忙しい状態

である」から存在が予測される前ラテン語の形式 Pre-Lat. *gnāti-「忙しさ、生産」が見つかる[19]。

5.2 予測に反する形式

上記にて確認したように、ラテン語には語根の母音階梯がゼロ階梯を示す語形が見つかる。その一方で問題となるのは、印欧祖語の段階に生じたとされる語根のゼロ階梯の一般化にも関わらず、ゼロ階梯に遡ることができない母音階梯を持つ形式が見つかる点である。それは表 5 の一番右の列の、語根の母音階梯が標準階梯に由来する 11 例である。また、表 4 のケルト諸語において、標準階梯に由来する形式は CeT- もしくは CeH- という語根構造のいずれかを示していたが、その一方ラテン語においては、語根の標準階梯に由来する語形は、CeT-, CeN-, CeH-, CeW-, CeNH- および CeTT- と幅広い構造において見つかる。

---

[19] Lat. *genti-*「民族、一族」については、*ǵn̥-ti-* に遡ると考えれば規範的なゼロ階梯から導かれるが、*ǵen-ti-* もしくは *ǵenh₁-ti-* に遡ると考えれば標準階梯から導かれる形式である。先の二つの祖形を採用するのであれば、語根は LIV 163 *ǵenh₁-*「産む、生産する」ではなく *ǵen-* という別の語根、もしくはラリンジャルが脱落した異形態を想定することになる。確かに語根 LIV 163 *ǵenh₁-*「産む、生産する」については、語根のラリンジャルを持つ形式が広く在証されている一方、語根末にラリンジャルを持たないように見える形式も見られる (KeWA I 428, Schrijver 1991: 329) 。

(1) 語根末のラリンジャルが反映されている形式
- Gk. γένεσις「出産、起源」< *ǵenh₁-ti-* (Beekes 1969: 228) もしくは *ǵn̥h₁-ti-* (Rix 1976: 73)
- Lat. *genitor*「父親、父」< *ǵenh₁-tor-*
- Gk. γενέτωρ「父、祖先」< *ǵenh₁-tor-*
- Ved. *janitár-*「父」< *ǵenh₁-tor-*

(2) 語根末のラリンジャルを持たないように見える形式
- ON. *kind*「種類、種族 (f.)」< *kenðí- < *ǵen(h₁)-ti-?
- Ved. *jantú-*「生き物、人間 (m.)」< *ǵen(h₁)-tu-?

ここから、語根 *ǵenh₁-*「産む、生産する」のヴァリアントとして語根 *ǵen- が存在していたように考えられるかもしれない。しかし、上記の形式はそれぞれ別のラリンジャル消失の原理で説明されうるため (ON. *kind*「種類、種族 (f.)」については子音間の成節的なラリンジャルの語中音節での消失として説明される (Beekes 1988a: 85f., 1988b: 68, 96) 。また、Ved. *jantú-*「生き物、人間 (m.)」におけるラリンジャルの脱落については EWAia I 570, NIL 141 参照。"Die -*i*-lose Form *jan°* … ist wohl in Sonderbedingungen wie *jantv-´ < *ǵenh₁- tw-´ entstanden… (EWAia I 570)") 、これらの例は *ǵen- という語根を祖語の段階に想定する決定的な証拠とはいえない (de Simone (1995/96: 256) はそれぞれの語派で独自に成立したと想定している。"… dass die Entwicklung *ǵénh₁-ti- > *genti- im Latein und Germanischen (*genti-, *kénþi-*) (und jungaw. *fra-zaⁱṇti-*?) erst einzelsprachlich eingetreten ist (de Simone 1995/96: 256).") 。最低限の想定で Lat. *genti-*「民族、一族」を説明するには、*ǵenh₁-ti- という再建形が最も優れているように感じられる。しかし、語根 *ǵenh₁- の標準階梯から導く *ǵenh₁-ti- > *genati- > *genti- という再建については、語末に短母音を持つ 3 音節語での語中音節のシンコピーが想定しにくいと考える Schrijver (1991: 330) およびそれに対して de Simone (1995/96: 250f.) などの議論がある。語中のシンコピーの問題を詳しく考慮する必要があるため、ここではこの再建形に利点があるということを指摘するに留めたい。

しかしながら、このことはこれらの標準階梯を示すラテン語の形式を以下の 3 つのグループに大きく分類することで、統一的に説明することができる。その分類とは、(1) CeT- もしくは CeTT- という語根構造を持つグループ、(2) CeH- という語根構造を持つグループ、 (3) *o* 階梯を示すグループである。

5.2.1　CeT(T)- という構造の語根を持つグループ

ラテン語に残されている形式で (i) の語根末が閉鎖音もしくは *s* で終わる CeT- という語根構造を持つ形式は、いずれも標準階梯 (3 例 が *e* 階梯で 1 例が *o* 階梯) から導かれる形式を示している。(x) の CeTT- の構造の語根についても同様に標準階梯から導かれる形式である。印欧祖語の段階で語根のゼロ階梯が一般化されたことを考慮すると、これらの形式は *CT(T)-*ti*- という構造のゼロ階梯、もしくはそれに接辞 *-*ti*- が付加された形式が極めて古い段階 (おそらく印欧祖語の段階) で音連続上許容されず、そのため語根に二次的な母音 *C_eT(T)-*ti*- を獲得した[20]、もしくは標準階梯が一般化された結果として考えられる。

5.2.2　CeH- という構造の語根を持つグループ

(iv) の語根末がラリンジャルのみで終わる CeH の語根については、ケルト語派と同様に標準階梯とゼロ階梯の両方から導かれる形式がラテン語に現れている。これらについては、一方が規範的に形成され、他方がラテン語の内部で二次的に形態的影響を受け形成されたと一般に説明される[21]。

この立場では標準階梯を示す 3 つの形式である Lat. *fētiāli*- 「伝令僧」、Lat. *quiēti*-「休息、休憩」、Lat. *mētīrī*[22]「測る」のうち、先の 2 つの形式はアオリスト起源の完了語幹 Lat. *fēc*-「作る、成す」と Lat. *quiēv*- 「横になる、眠る」からの形態的影響を受けていると考えることができる。並行例として、接辞 *-*to*- を持つ形式の中で標準階梯に由来する語根を示すような形式が挙げられる。それらの形式は Lat. *sprētus* 「軽蔑」が Lat. *sprēv*- 「分ける、軽蔑する (pf.) 」、Lat. *nōtus* 「知られている」が Lat. *nōv*- 「知る (pf.) 」といったアオリスト起源

[20] 二次的な母音は音声的な起源を持つなら **ə* 、形態的な起源を持つならば **e* であったと考えられる。

[21] その一方、複合語の第一要素を起源として印欧祖語の段階で既に標準階梯を持つ形成法として確立されていた可能性があることを Vine (2004) が指摘した。

[22] この形式は前ラテン語の名詞 †*mētis* からの名詞派生動詞であると考えられる。

の完了形からの類推で二次的に語根の母音を獲得したと考えられる (Schrijver 1991: 340f.)[23]。これらはラテン語の先史で生じた変化と考えられるが、その一方、 Lat. *mētīrī* 「測る」については影響を与える元となるようなアオリスト起源の完了形がラテン語には在証されておらず、この考えで全ての語形を説明しきることはできない。インド語派に在証されている語根アオリスト Ved. *ámāsi* 「測る (mid.1.sg.) 」を考慮すると、イタリック語派の分岐以前の極めて古い段階で形態的影響によって CeH- という標準階梯に接辞 *-*ti*- を付加した形成が確立されていたことを、想定することが必要となる。また、CeT(T)- という語根構造を持つ形式が全て標準階梯に由来する一方で、CeH- という語根構造を持つ形式は標準階梯に由来する形式とゼロ階梯に由来する形式の両者が見られるのは、両者の構造の語根が異なる原因を持っているからであると考えることができる。後者の形態論的な影響の方が音韻論的な制約に対して緩やかである点もこの想定に合致する。

5.2.3 *o* 階梯を示すグループ

標準階梯を示す例の中で、以下の 3 つの形式が *o* 階梯に由来する形式を示している。それは CeT- の構造を持つ Lat. *hostis* 「見知らぬ人、敵」 (< *g^hos-ti-) 、CeN- の構造を持つ Lat. *mōns* 「山」(< *mon-ti-) 、および CeNH- の構造を持つ Lat. *fōns* 「泉」 (< *d^honh$_2$-ti-) である。Lat. *mōns* 「山」と Lat. *fōns* 「泉」が持つ CeN- と CeNH- の構造について表 6 のケルト諸語の分類においても標準階梯を示すような並行例は見られない。これらの形式は語根構造と母音階梯の関係について考える際に説明されなければならない形式である。Walde-Hofmann (1938-54: 108f., 525) では *to* 語幹動詞形容詞からの混同 (contamination) による *o* 階梯の形態的な獲得が想定されている。しかしこれに対して *o* 階梯を持つ *o* 語幹の形式は印欧諸語に広く見られるものの[24]、動詞形容詞を作る *to* 語幹は印欧祖語においてゼロ階梯が一般化されていると考えられており、そのような動詞形容詞との混同がラテン語の先史で生じたとは考えにくい。また、Ernout-Meillet (1959: 244f., 413, 538) では語根名詞からの派生が想定されている

[23] 語根: LIV 585f. *sp^herH- 「 (足で) 押さえつける、踏む」から *$sp^h$$_1$rH-to- > *sprā-to- >> (pf. *sprēvī* の影響で) *sprē-to- > Lat. *sprētus*、または語根: LIV 168-170. *ǵneh$_3$- 「知る」から *ǵn̥h$_3$-to- > *gnā-to- >> (pf. (*g*)*nōvī* の影響で) *gnō-to- > Lat. *nōtus* 。Lat. *fūtis* 「水差し」についてその母音は完了形 *fūdī* 「注ぐ (pf.1.sg.) 」もしくは完了分詞 *fūsus* 「注がれた (pp.m.nom.sg.) 」 (cf. *fūsus* 「注ぐこと (Varro, gen.sg. -ūs) 」) からの類推と考えられる (de Vaan 2008: 249f. 参照) 。

[24] このタイプにはギリシア語の τομός 「鋭い (adj.) 」などがある。

が、ラテン語において語根名詞が *-*ti*- や *-*t*- という歯音を二次的に獲得した例は無く、Lat. *mōns* や Lat. *fōns* が二次的に歯音を獲得して共時的に C*ōns* (gen.sg. C*ontis*) というグループに移行したことは考えにくい。更に、これらの形式が持つ *o* 階梯については上述の様なアオリスト起源の完了形といった形態的な影響を与えうる動詞のモデルも見当たらない。本論の趣旨から外れるので詳しい考察は別の機会とするが、上記の形式は語源的な *o* 階梯を引き継いでいる可能性があるということをこれらは示唆している[25]。

6　まとめ

ラテン語に残されている接辞 *-*ti*- を持つ形式を収集、分類し、語根構造と母音階梯との関係について考察を行った。

印欧祖語に再建される接辞 *-*ti*- の機能は動詞語根から動作の行為もしくはその概念を表す動作名詞を作ると考えられる。ラテン語では動作の行為もしくは概念を表す形式、およびそれらが具体化された形式が少数見つかるが、ギリシア語やサンスクリットに見られるような行為者もしくは道具を表す形式についてはその数は極めて少ない。

ラテン語にはゼロ階梯と標準階梯のいずれにも遡り得る形式も見ることができる。これらをゼロ階梯に由来すると考える場合、ゼロ階梯を持つ形式が幅広い語根構造を持っていることになるが、CeT(T)- という語根構造でゼロ階梯に由来する形式は見つからない。

また、ゼロ階梯ではなく標準階梯に遡ると考えられるラテン語の形式は CeT(T)- もしくは CeH- という語根構造を持つことが示された。前者はゼロ階梯の語根構造が音連続上許容されず、そのため語根に二次的な母音を獲得した結果として考えられる。その一方で、後者についてはラテン語の内部での形態的影響を受けたと考えられる形式も見られるものの、それだけで全てを説明することはできない。祖語の段階で CeH- の標準階梯を生み出した形態的影響を想定することが必要となる。CeT(T)- という語根構造を持つ形式が全て標準階梯に由来する一方で、CeH- という語根構造を持つ形式は標準階梯に由来する形式とゼロ階梯に由来する形式の両者が見られることは、両者の構造の語根が異なる原因を持っていたことを示唆する。後者の形態論的な影響の方が音韻論的な制約に比べて緩やかであるという点もこの分布に合致している。

[25] Garnier (2013) は Lat. *hostis* について集合名詞からの逆形成にその起源を求めている。

更に、CeT(T)- および CeH- という語根構造を持たないにも関わらず、標準階梯 (しかも *o* 階梯) に遡る例外的な形式が見つかることがわかった。これらは上述のような形態的影響では説明することができず、語源的な *o* 階梯に遡る可能性を示唆している。

上記から、動詞語根のゼロ階梯から接辞 **-ti-* を伴う全ての一次派生の名詞形式が一律に派生したというような従来の説明では不十分であるということが明らかになった。ラテン語には動詞からの形態的影響を受けて二次的に標準階梯を獲得した可能性のある語形も見つかるが、特定の語根構造を持つ形式については、既に祖語の段階でゼロ階梯ではなく標準階梯から派生されていた可能性が高いということが、ラテン語に残されている形式から見て取ることができる。

7　略号一覧

abl. = ablative; adj. = adjective; adv. = adverb; C = consonant; dat. = dative; f. = feminine; fut. = future; gen. = genitive; Gk. = Greek; H = laryngeal; inf. = infinitive; Lat. = Latin; m. = masculine; mid. = middle; MIr. = Middle Irish; N = nasal; n. = neut. = neuter; nom. = nominative; OIr. = Old Irish; ON. = Old Norse; Osc. = Oscan; pf. = perfect; PGk. = Proto-Greek; PIE. = Proto-Indo-European; pp. = past perfect participle; Pre-Gk. = Pre-Greek; Pre-Lat. = Pre-Latin; pres. = present; R = liquid; sg. = singular; Skt. = Sanskrit; T = plosive or *s*; Umb. = Umbrian; Ved. = Vedic Sanskrit; W. = semivowel; YAv. = Young Avestan; 1 = first person; 3 = third person

Andr. = Livius Andronicus (ca. 284-204 BC); Cato = Marcius Porcius Cato Censorius (234-149 BC); Enn. = Quintus Ennius (239-169 BC); Fest. = Sextus Pompeius Festus (ca. 150 AD?); Lex XII. = 十二表法 (451-450 BC); Naev.= Gnaevus Naevius (ca. 270-201 BC); Pl. = Titus Marcus Plautus (ca. 254-184 BC); Ter. = Publius Terentius Afer (195/185-159 BC); Varro = Marcus Terentius Varro (116-27 BC);

EDG = BEEKES, R. S. P. 2010., EWAia = MAYRHOFER, M. 1986-2001., KeWA = MAYRHOFER, M. 1956., LIV = RIX, H. ed. 2001., NIL = WODTKO, D. S. — B. IRSLINGER — C. SCHNEIDER 2008.

8　参考文献

- BEEKES, R. S. P. 1969. *The Development of the Proto-Indo-European Laryngeals in Greek.* The Hague/Paris: Mouton.
- BEEKES, R. S. P. 1988a. *A Grammar of Gatha-Avestan.* Leiden/Boston: Brill.
- BEEKES, R. S. P. 1988b. “Laryngeal Developments: A survey” In: A. Bammesberger (ed.) *Die Laryngaltheorie und die Rekonstruktion des indogermanischen Laut- und Formensystems*, 59-105. Heidelberg: Carl Winter.
- BEEKES, R. S. P. 1995. *Comparative Indo-European Linguistics: An Introduction.* Amsterdam: Benjamins.
- BEEKES, R. S. P. 2010. *Etymological Dictionary of Greek.* Leiden/Boston: Brill.

- BENVENISTE, E. 1935. *Origines de la formation des noms en indo-européen.* Paris: Adrien-Maisonneuve.
- BRUGMANN, K. 1906. *Grundriss der vergleichenden Grammatik der indogermanischen Sprachen. Vol. 2, Part 1: Lehre von den Wortformen und ihrem Gebrauch.* 2nd ed. Strassburg: Trübner.
- CHANTRAINE, P. 1999. *Dictionnaire étymologique de la langue grecque: histoire des mots.* 2nd ed. with supplement. Paris: C. Klincksieck.
- DE SIMONE, C. 1995/96. "Lateinisch *gēns* "Geschlechterverband, Sippe" (Stamm *genti-*)" *Glotta: Zeitschrift für griechische und lateinische Sprache* 73: 247-56.
- DE VAAN, M. A. C. 2008. *Etymological Dictionary of Latin.* Leiden/Boston: Brill.
- ERNOUT, A. — A. MEILLET 1959. *Dictionnaire étymologique de la langue latine.* 4th ed. Paris: C. Klinkcksieck.
- FORTSON, B. W. IV 2004. *Indo-European Language and Culture: An Introduction.* Malden: Blackwell.
- GARNIER, R. 2013. "Le nom indo-européen de l'hôte" *Journal of American Oriental Studies* 133(1): 57-69.
- HOFFMANN, K. 1955. "Ein grundsprachliches Possessivsuffix" *Münchener Studien zur Sprachwissenschaft* 6: 35-40.
- IRSLINGER, B. S. 2002. *Abstrakta mit Dentalsuffixen im Altirischen.* Heidelberg: Carl Winter.
- LEUMANN, M. 1977. *Lateinische Laut- und Formenlehre.* München: Beck.
- MAYRHOFER, M. 1956. *Kurzgefasstes etymologisches Wörterbuch des Altindischen.* Heidelberg: Carl Winter.
- MAYRHOFER, M. 1986-2001. *Etymologisches Wörterbuch des Altindoarischen.* Heidelberg: Carl Winter.
- MATASOVIĆ, R. 2009. *Etymological Dictionary of Proto-Celtic.* Leiden/Boston: Brill.
- MEIER-BRÜGGER, M. 2000. *Indogermanische Sprachwissenschaft.* 8th ed. Berlin/New York: Walter de Gruyter.
- MEILLET, A. 1925. "Sur le rôle et l'origine des noms d'action indo-européens en **-ti-*" *Bulletin de la Société de Linguistique de Paris* 25: 123-45.
- MEILLET, A. 1937. *Introduction à l'étude comparative des langues indo-européennes.* 8th ed. Paris: Hachette.

- MEILLET, A. — J. VENDRYES 1979. *Traité de grammaire comparée des langues classiques.* 5th ed. Paris: Champion.
- NUSSBAUM, A. J. 2005. "Halfuncular: The Latin Nouns in *-iō, -iōn-*" Handout presented at the 24th East Coast Indo-European Conference, June 2005, University of California, Berkeley.
- NUSSBAUM, A. J. 2006. "Latin *-(t)iōn-* and Relatives: The Other Shoe" Handout presented at the 25th East Coast Indo-European Conference, June 2006, Ohio State University.
- OLSEN, B. A. — J. E. RASMUSSEN 1999. "Indo-European *-to-/-tu-/-ti-*: A case of phonetic hierarchy" In: H. Eichner et al. (eds.) *Compositiones Indogermanicae in memoriam Jochem Schindler*, 421-435. Praha: Enigma.
- REICHLER-BÉGUELIN, M.-J. 1986. *Les noms latins du type* mēns*: Étude morphologique.* Brussels: Latomus.
- RIX, H. 1976. *Historische Grammatik des Griechischen.* Darmstadt: Wissenschaftliche Buchgesellschaft.
- RIX, H. ed. 2001. *Lexikon der Indogermanischen Verben.* 2nd ed. Wiesbaden: Dr. Ludwig Reichert.
- SCHINDLER, J. 1972. "L'Apophonie des noms-racines indo-européens" *Bulletin de la Société de Linguistique de Paris* 67(1): 31-38.
- SCHRIJVER, P. 1991. *The Reflexes of Indo-European Laryngeals in Latin.* Amsterdam/ Atlanta: Rodopi.
- SCHWYZER, E. 1953. *Griechische Grammatik, I: Allgemeine Teil, Lautlehre, Wortbildung, Flexion.* München: C.H.Beck'sche Verlagsbuchhandlung. [repr. 1990]
- SOMMER, F. 1914. *Handbuch der lateinischen Laut- und Formenlehre: Eine Einführung in das sprachwissenschaftliche Studium des Lateins.* 2nd and 3rd ed. Heidelberg: Carl Winter.
- VINE, B. 2004. "On PIE Full Grades in Some Zero-Grade Contexts: *-*tí*-, *-*tó*-" In: J. Clackson and B. A. Olsen (eds.) *Indo-European Word Formation*, 357-380. Copenhagen: Museum Tusculanum Press.
- VIJŪNAS, A. 2009. *The Indo-European Primary* T-*Stems.* Innsbruck: Innsbruck Beiträge zur Sprachwissenschaft.
- WACKERNAGEL, J. — A. DEBRUNNER 1954. *Altindische Grammatik. Band II, 2 Die Nominalsuffixe.* Göttingen: Vandenhoeck und Ruprecht.

- WALDE, A. — J. B. HOFMANN 1938-54. *Lateinisches etymologisches Wörterbuch.* Heidelberg: Carl Winter.
- WEISS, M. 2009. *Outline of the Historical and Comparative Grammar of Latin.* Ann Arbor: Beech Stave Press.
- WODTKO, D. S. — B. IRSLINGER — C. SCHNEIDER 2008. *Nomina im indogermanischen Lexikon.* Heidelberg: Carl Winter.
- ZAIR, N. 2012. *The Reflexes of the Proto-Indo-European Laryngeals in Celtic.* Leiden/Boston: Brill.
- 大西貞剛 (2011) 『印欧語の接辞 *-*ti*- のラテン語における発展』京都大学大学院文学研究科 修士論文

On the Indo-European suffix *-*ti*- in Latin: An analysis with a focus on the relationship between vowel grades and root structures.

Teigo ONISHI

Abstract

The Indo-European suffix *-*ti*- has traditionally been considered to be added to roots in the zero grade to form abstract nouns. Classical Indo-European languages, such as Greek and Sanskrit, preserve this suffix well, and various forms such as abstract nouns, agent nouns and instrument nouns, are found in those languages. However, in Latin, since the enlarged suffix **-ti(y)ōn-* came to be used productively, the number of forms which appear to have the suffix **-ti-* is limited and they are mostly limited to abstract nouns.

In this paper, I collect Latin nouns which seem to have *-*ti*- in their suffix and sort them according to their historical vowel grades. My survey reveals that the root vocalism of most Latin nouns formed with this suffix is ambiguous between *o*/*e* and zero, although traditional explanations tend to favor the zero-grade. However, in contrast to the general pattern, we find some irregular nouns that cannot be derived from a zero-grade root. I divide the irregular Latin nouns into the following three groups.

The first group contains nouns with a root structure of CeT or CeTT. Here the vocalism is probably due to secondary vowel insertion which took place at an archaic stage; e.g. *messis* 'reaping, crop' < **met-ti-* (Root: LIV 442 ?1.**met-* 'to harvest'). The second group contains roots with a final laryngeal; e.g. *quiēs, quiētis* 'rest, sleep' (f.Pl. +) < **k*^{w}*yē-ti-* (Root: LIV 393 **k*^{w}*yeh*$_1$- 'to rest'), in which the vocalism goes back to the *e*-grade or was possibly secondarily introduced from the perfect or root aorist; e.g. *quiēvī* 'lay down, sleep (pf.1.sg.)'. The third group consists of two problematic nouns namely, *mōns, montis* 'mountain' and *fōns, fontis* 'spring', which appear to display *o*-vocalism in the root.

受領日　2014年9月25日
受理日　2014年12月1日